

住民と狀

を移住せしめ、一意植民に勉むるも未だ舊時の隆盛に復せず、當年人口三十五萬以上と註せられしもの、現在其半數にも達せずと云へば、如何に該叛亂の酷烈たりしかを察すると共に、此に至りし所以の理も亦自ら知るに餘り有り

由來斯る沃野の地をして空しく哈薩克、蒙古族の游牧するに放任したるさへ遺憾なるに、況んや清人ならざる露人の、到る處に土地を所有し、常住し、清國の領土を露國の領土と同視し、伊犁一帶、清人多きが露人（歐露人は至て少く大部は露領土耳機斯坦人なり）多きかを疑はしむる今日の狀態を實見したる予は、豈清國の爲めに寒心せざらんと欲するも得んや。

然らば伊犁目下の衰頽は、如何にして振興し得べき乎、并は頗る急要の問題に屬す。予を以て曰はしめは、第一に交通を便にし、兵備を改善し、移民を奨勵するに若かざるなり。現今在伊犁清人の大部分は、漢回及纏頭回にして、彼等は一朝有事の際清國の爲めに盡すべき者とは思はれず。宜しく移民を奨勵し、數十萬の滿漢人を是に移住せしむるを要す。天然の良土は隨處人の速に來て開發するを待つ、在り。秋以正が『南村又北村、桃李花開得、待君君何遲、日日春風色』と伊犁目下の